

第7分科会 子どもの姿から、保育を総合的に考える

ねらい『保育者の子どもの見方で、保育がかわる。子どもがかわる。保育者として、子どもの見方を追及し、子どもが表現している心の声によりそうことが出来たら・・・。

きっと、日々の保育が豊かになる。子どもと共に、育ちあえる保育者をめざして。』

講師 山口大学 准教授 川崎 徳子 様

指導講話とグループ協議を通して

講師の思い・・・この分科会の参加者が、この時間を通して

保育のプロとして自分自身の保育を振り返り、日頃の保育で苦勞するところも自身の力と変え、自信を持って子どもたちと接することが出来るようになってほしい。そのために、子どもの世界・子どもの心の世界を、“考える”ということに参加者と共にし、子どもの姿をどう見とるかについて話し合っていきたい。



保育者という大人を介して、色々なことが子どもに伝わっていくため、子ども理解のために、先に大人の思考について考えてみよう。

・温泉という文字をみてイメージされるものは？から

温泉⇒サル・温泉⇒美肌など、温泉という文字を同じように共有していると思いがちであるが、実際は考えていることや思い出されていること、味わっていることは人それぞれにある。

文字によって思考を動かし、様々な人間活動を行っているが文字だけで分かっているわけではない。文字、言葉にならない体験やその時の衝動的な思いもある。イメージをもつということは、目の前に現物がないのに感じ、考え、その物のもつ様々な意味ともつなぎ合わせて考えることである。人には、その象徴とよぶ機能が備わっており、様々な身体的感覚・体験・色々な事柄が頭の中でつながり想像し考えることとなる。

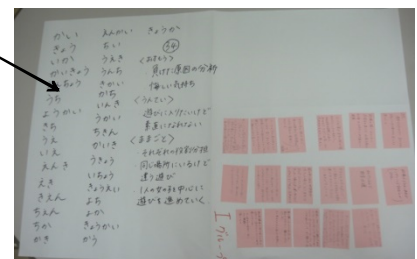
・グループ協議 グループの中で司会者と記録係を決め、大判用紙に記入。

(グループはA～Lの12グループである。1グループ7名～11名である)

アナグラム問題→ようちえんきょうかいの10字を使ってできるだけ多くの単語作り、その単語の中のグループごとのベスト1を発表することから

各グループ30～40個の単語がだされ大判用紙に記入する。

各グループ発表(ようかい・うかい・いえ・ちか など)



知っていることを思い出すだけでは解決できないような問題は、創造的に思考するということも必要になる。思考は

一つの解答を目指すような収束的思考、覚えたものを使う集中的思考、様々な情報から何かの手がかりをつかんで複数の解答を導き出す拡散的思考もある。その拡散的思考で、更に独創的で有益なものに導いていく力が創造性であり、これは様々なアイデアが必要で、予想できない社会生活の中では大変重要な能力の一つある。日常生活の中では、その元になる基礎的な知識や技

能、そしてそれを活用する判断力、表現力、対話力が必要である。非認知能力(社会情動的スキル)と言われる集中力、コミュニケーション力、自己コントロール等が課題を解決するための認知能力などを支える力として大切であると新しい学習指導要領で見直されている。また、主体的・能動的に活動するためにも、非認知能力(社会情動的スキル)は、大切で、幼児期の遊びを中心とした保育の中で育まれる可能性がある。そのことから、将来大切になってくる力を育む場所として幼児教育が大切だと言われている。

・新しい学習指導要領等が目指す姿

育成すべき資質と能力の三つの柱

- i 何を知っているか、何ができるか(個別の知識、技能) → **非認知能力(社会情動的スキル)**
 - ii 知っていること・できることをどう使うか(思考力、判断力、表現力) ↗
 - iii どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を生きるか(人間性や学びに向かう力) ↑
- 非認知能力(社会情動的スキル)の学び方の工夫 → **アクティブラーニング**

・OECD 調査

非認知能力(社会情動的スキル)を育むことの重要性

良質な保育や、丁寧な関わりをもって育った子どもは、そうでない子と IQ 知能(10 歳くらい)は変わらないが、働き方や犯罪歴などに違いが出てくるという調査結果が出ている。それは、知識技能というところではなく、実は非認知的な能力の部分が違うのではないかとされている。そのため非認知能力(社会情動的スキル)は、丁寧に育むことが重要であり、その力を育みやすいのが幼児期であると言われている。

次に子どもの姿から考えていく。

どんな体験をし、どんな育ちの可能性があるかの視点で、
子どもの姿を視聴する。



・子どもの姿を視聴する

『原っぱで相撲(年長)』(江口幼稚園)



相撲をしているだけでなく、活動の中で様々な体験をしている。勝ち負けの経験、自分なりに分かってほしいこと、先生に自分の思いを伝えようとする事など、その切な思いを受け止めてもらいながら、今の自分に向き合い納得していくことに時間をかけ、次へ向かおうとしている。

そういう遊び・活動の体験は言葉、記憶によって、かつ言葉は一部であり、言葉にならないその中身、思考、感覚、情景など様々なイメージも、共に子どもの中にためこまれていく。その中身

豊さが、これからの生きていく力になっていくのではないかと思う。

いろいろな遊びや活動を通して、色々な気持ちや多くの思いを持ってほしい。

『雲梯に上って、仲間に入れて（年中）』（江口幼稚園）

けんかをして、一人離れてしまった子ども。子ども達にもけんかを修復する時間がある。友達の様子を見ながら、自分の気持ちを整理し、少しずつお互いが、相手を気にするようになる。子どもなりにコミュニケーションの取り方を学んでいるが、そこには、子どもの思いにまかせた、ある程度の時間が必要である。その時間を見守れる保育者の視点が必要である。



『築山でままごと（年少・年長）』（江口幼稚園）



役になったり何かに没頭したりしながら、言葉にはならない様々な思考活動や、その元になる言葉と体験がためこまれている。それが言葉によって言語化され思考を助ける道具になっている。更に友達の思いにふれ、やりとりをする中で他者の視点を考え、様々な構造、ものなどが言葉や思考に関連しながら、内面の成長を支えている。それがこの遊びの中の世界である。

蓬が生えている築山の上での、おままごと。傍にある蓬をちぎって、年少児の運んできた水と混ぜてのご馳走作り。築山の上から汲んで来た水を流し、その水の流れた後に興味津々。

幼児が興味や関心を持ち、思わず、かかわりたくなるような、人、物、事柄があると意欲が引き出され主体的活動へとつながる。育ちへの期待と保育者の願いから、必要な経験のための、環境を構成する。

保育者の専門的な子どもの見とり方を鍛えていく

- ・ 保育者がおもしろい、心に残った子どもの姿、動きなどを書きとめる。
- ・ 保育者が注意を向け、興味をもって見る。
- ・ かかわりながら、体験的に感じていく

その事は、心に残るエピソードとなり、子どもをよくみることに繋がり、子どものことをもっと知ろうとするようになる。

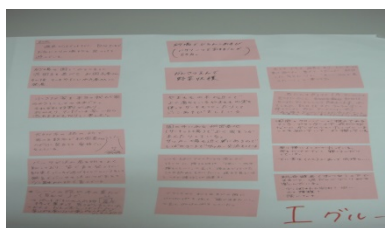
↓
子どもの具体的な姿が浮かび、保育者のねがいが生まれる。

↓
具体的な保育の場面へ生かしていける

↓
保育を見直す。カリキュラムを見直す。
好きな遊びと意図的計画的な活動（一斉指導）

↓
ふさわしい生活、保育を振り返る、環境を考える

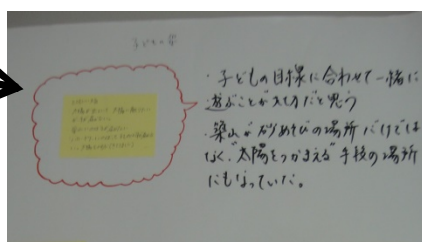
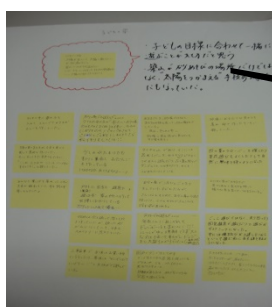
*各グループで、エピソードを付箋に書きとめる。



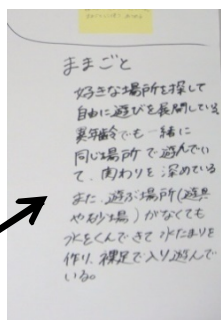
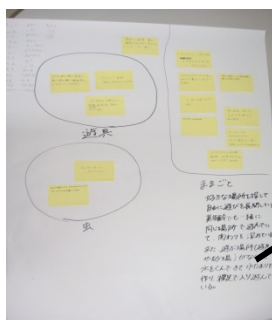
- ・アスレチックのような総合遊具の上までのぼり、降りることが出来ない先生を呼ぶが、見てると自分で降りることが出来る。上まで行けたことを、先生に認めてほしい。

- ・バッタの沢山いる所を知っており、皆で声を出さないことを約束して(バッタが逃げるかららしい)、たくさん捕まえその場から離れたところで喜んでいる。など

*エピソードを分類し、各グループで1番印象深いエピソードを発表する。



- ・築山が、砂遊びの場所だけでなく、太陽を捕まえる場所になっており、子どもと同じ目線で遊ぶことが大切である



- ・自分で好きな場所を探して、異年齢で遊んでいる。用具はなくても、自分で水を汲んできて水たまりを作りそこで遊んでいる。

- ・自分のスペースを作り、花びら・貝がら・葉っぱの取りに行きやすいところで遊んでいる。

- ・坂道で水を流して遊ぶ。 など

- ・年齢によって、遊ぶ場所を選んでいる。また、広い園庭でも、年長児の縄張りとなる場所がある。

おわりに

その日の保育を振り返ることで、もっていなかった視点がもてるようになる。そして、自分の保育を具体的な保育現場に生かしていくことできるため、園の環境へとつなげていってほしい。子どもの特性、発達を受け止めながら、子ども理解に努め、子どもの内側に秘められている事柄を、信頼する大人と共に考え、深く専門的な見取りをしなければならない。

振り返りのエピソードは、どんな小さなメモにでも、書き留めることが必要で、それを手がかりにして創造し、拡散的思考として鍛えていくことが大切である。

記憶を記録として残していき、園の保育が充実し、子どもの世界、子どもの育ちや思考があることを周囲にきちんと伝えられると良い。

保育者は、子どもに寄り添い 子どもと一緒に成長する。